

# 俳句甲子園メール

NPO法人 俳句甲子園実行委員会 (E-mail:info@haikukoushien.com)  
〒790-0814 愛媛県松山市味酒町1丁目10-2

TEL:089-943-1512(平日13:00~17:00) FAX:089-948-4819

松山市役所 文化・ことば課 (E-mail:bunkakotoba@city.matsuyama.ehime.jp)

〒790-8571 愛媛県松山市二番町四丁目7番地2

TEL:089-948-6952(平日8:30~17:15) FAX:089-934-1287

2016年霜降号

No.016

松山市は全国47都道府県の高校からの大会エントリーを目指して、参加校の拡大に努めています。大会の魅力を直接感じていただくため、大会視察にお招きした5県5名の先生方のお一人、長崎県立平戸高校の林田誠一先生に全国大会の感想をご寄稿いただきました。

# 熱を感じ続けた3日間 言葉と声の『マリアージュ』

「俳句甲子園を視察して」

長崎県立平戸高校

林田誠一

## 俳句とワイン

俳句甲子園で披露される俳句は、それぞれ一本一本のワインのようだ。大会本部に提出された時点で瓶詰めされた俳句は、大街道で、松山市総合コミュニティセンターで初めてコルクを開けられる。寝かされていた言葉が声という温かみを伴って立ち上がる瞬間は、いつも新鮮な感動を与えてくれた。

さらに、句を巡ったの質疑応答では、作者の思ってもみなかった解釈がなされたり、相手の質問によって句の解釈がさらに深まったりする。それはまさにワインが様々な料理と出会うことで生まれる「マリアージュ」のようなものだ。これこそまさに「座」の文芸としての俳句の姿だと感じた。

のけなしあいになりかねない危うさを感じた。けれども、それ以上に、俳句が何度も生まれ変わりを、より深く、より豊かになるためには、質疑応答は必要だと思ふ。「気持ちいい聞き方をすれば、気持ちいい答えが返ってくる」。相手の句を認め、良さを引き出すことに心を砕いた愛光高校の生徒の姿勢が、その答えを示してくれているように感じた。

## ことばは人間を使ふ

高校の現場では、韻文教育が危機に瀕しているように思ふ。教えることが難しいといふことも理由の一つかもしれない。また、大学入試で韻文が素材になることがほとんどないことも影響しているかもしれない。評論文の指導には力を入れるのに、韻文を授業でほとんど扱わない学校もあると聞いていた。

「ことばは人間を使ふ」という句は、表現としての言葉と精一杯向き合ってきた経験の中から生み出されたものであろう。韻文教育がやせ細ってしまっている今だからこそ、言葉への信頼、言葉への憧憬、言葉への畏怖を感じさせてくれる俳句甲子園の意味はとて大きい。

## 熱を伝える

俳句甲子園に関わる人の「熱」を感じ続けた三日間だった。

俳句甲子園の最大の魅力は「熱」そのものであると断言

## 視察に来られた先生方のご感想

審査員の先生方が高校生に愛情をもって優しく伝えてくださって、嬉しく心地よく感じました。

山形県立山形南高校 寺澤裕子

質疑応答は「欠点を突いて攻撃する」ものではなく、「よさを認め、さらに工夫点を探る」ためのものだといふことがわかりました。

富山県立中央農業高校 山腰美佐子

したい。高校生の「熱」が中心にある。この俳句甲子園に向けて一体どれだけの句が作られたことであろう。句にまとまる前の言葉を含め、無数の言葉の力が「熱」となって松山を熱くしていた。

そしてその高校生を支える実行委員会の方々、OBORG会の方々の「熱」も想像以上だった。前回までの成功に満足せず、よりよい形を求め続ける「熱」が、俳句甲子園を進化させ続けている。

今回の視察を通して感じた「熱」を私の地元にもどすように伝えていくのが、私の仕事である。

## 終わりに

視察を通じて得たつながりをこれからも大切にしたいと思ふます。お世話してくださった方々に心から感謝しております。ありがとうございます。

チームで戦うからこそ得られる達成感があるのだと感じました。ぜひ子どもたちにも、俳句甲子園の空間を感じさせたいと思ひました。

佐賀県立伊万里高校 池田めぐみ

以前は、自分の県からの大会参加は難しいと思つていましたが、今は「難しくても情報を広める所から始めよう」と考えています。

鹿児島県立松陽高校 川畑美沙